

第 70 回 ヨコハマ市民まち普請事業部会 議事録	
日時	平成 30 年 7 月 28 日 (土) 13 時 00 分から 15 時 45 分まで
開催場所	戸塚区役所 8 階中会議室 2
出席者 【敬称略】	部会委員) 杉崎部会長、岡本、男澤、河上、川原、塩入、菅、鈴木 事務局) 横浜市：嶋田、甲斐、谷田、森、池宮、羽賀 市民セクターよこはま：加世田、山田、北川 アクションポート横浜：土屋、高橋 報告者) 熊野の森もろおかスタイル 肥後代表
欠席者	
開催形態	公開
議題	1 平成 29 年度整備箇所 (熊野の森もろおかスタイル) の状況報告について 2 第二次提案書について 3 平成 30 年度活動懇談会について 4 企業との連携について 5 その他
報告	
検討事項	
議事	<p>(事務局) 杉崎部会長より 30 分程度遅れるとのご連絡をいただいているので、部会長が到着するまでの進行を河上委員にお願いします。</p> <p>(河上) 今日はよろしくお願いします。議事に沿って、まずは熊野の森もろおかスタイルの状況報告をお願いします。</p> <p>1. 平成 29 年度整備箇所 (熊野の森もろおかスタイル) の状況報告について【資料 1】</p> <p>(肥後) (資料に基づいて、報告)</p> <p>(河上) ありがとうございます。委員より質問を受け付けたいと思いますが、進行なので私から。1 年 3 か月でよくここまで環境活動としても地域のまちづくりとしても、畑のデザインとしてもとてもテンポよく進めていただいたと思いました。場所がなくなってしまい、これから代わりを探すということだけを聞いていたので、今日プロセスを聞いて、十分ヨコハマ市民まち普請事業の目的としていた効果は非常に感じました。逆に短期間でこれだけ良い事業をたくさん作っていただき、本当にありがとうございました。御礼を申し上げます。</p> <p>その中で私からの質問ですが、とてもいい課題を洗い出してくださったと思いました。「誰が熊野の森もろおかスタイルのメンバーか分からない」という話が気になったのですが、私たちがコンテストで「メンバー以外の方に参加してもらってください」とか、「地域にどんどん広げてください」と言いますが、今回、量と質という意味で、当初のメンバー以外にどれくらい活動が広がったという手応えを感じているかという点と、もう一つは、地主のご夫婦の中で意思疎通が上手くいっていなかったと思っていたのですが、今日の報告では、ご夫婦それぞれが活動に参加して、それぞれが応援してくださっていたけど、土地利用が変わることになったということなので、その参加されていた時の良かった時の感触と言うか、どの程度一緒に活動してくださったかという、良い関係の方を教えていただきたいと思います。</p>

2点、地域の中でどのような広がりがあったかという感触を教えてくださいたいのと、地主の方と年明けくらいまで良い感じで上手くいっていたと思うのですが、その中で地主の方のサポートで良かった点、この2点について教えてください。

(肥後) 1点目のどういう波及効果があったかということですが、バンダナを作っていて、作業をしにきて、出入りしたり収穫したりする時に顔が見える関係になれば、それほど気にならないけど、活動が多少有名になってくると知らない人が見に来ることがあったり、それがイベントなどで事前に「こういう人が来ます」と言ってあってという場合は良いのですが、知らない人が出入りしているということが、地主さんとしては不安というか気になったということだと思います。ただ、それで私たちもその部分に関してはデリケートに考えるようになったし、それ以外のオープンなイベントの時には、色々な人に声をかけて楽しくしてくれる人が出てきたことは良かったと思います。あと、私たちはエコステーション以外の他の場でイベントをやったり、町内会で落語会をやったりということと、私がこのような活動をしていることで、町内会から白羽の矢がたって、今は民生委員と防災委員も担当していて、そういうところで顔が見える関係になって、信頼を得られるようになったのではないかと思います。町会の人たちも応援はしてくれているし、色々言う人はいると思うけど、心配して実際に声をかけてもらったりしているので、そういうことも出てきたと思います。

あともう一つ地主のご主人ですが、現場監督をやっていたように、ものづくりが本当に好きな方です。子どもも好き。色々ご家族も掛け合ってくれたのですが、何が本当の理由かは分かりません。保育園ができて、エコステーションを使ってもらえたら、また新しい展開が生まれると思っていました。町会の中で色々と言う人はいるので、そういったことが耳に入ったのかもしれないし、良く分かりません。でも、私はこの土地を4年くらい借りて、耕したり、活動させてもらって、今回まち普請に応募したのは自然の流れだったと思うのですが、時代なのか、なぜ続けられなかったのかと今も考えるばかりです。

(河上) ありがとうございます。他の委員からご質問や励ましの言葉などありますでしょうか。私はお話しいただいた、エコステーションが持ち運びできる良さがあるって、いわゆる常設の居場所というものとはまた違う、イベント的な場所もあったと思うので、その両方が可能だというのが非常に魅力的だなと思っていました。その中で5年の縛りというのは、こちらは大変なことをお願いすることになっていたかもしれないと反省も感じました。

(肥後) でも、この展開はわからなかったです。

(川原) ありがとうございます。まさにこの1年と少しの間に信用を築かれたのだと思いますが、私も農家さんから土地を借りて近所の人のための公園みたいな場をつくる活動に加わっていて、そこでの地主さんとのやり取りも振り返ると、やはり地主さんは税金を払っていて、その税金分だけでもこの活動の中でお金を生み出して、地主さんに「お礼の気持ちを込めて」の様なことができないか。地主さん側に立った時に何ができるかということ想像しながら聞いていました。今後どうなるか分かりませんが、活動の中でバザーとかお金を生み出すことが、地主さんのメリットになると良いのかなと感じました。

(肥後) まさしく、これからの展開でそれをやっていこうとされていて、私は割とゆるゆる

と定着させていくイメージがあったのですが、4月以降にそれができていたら地主さんにも還元ができたと思います。お金の話は当初からして、「少しでも地代は払います」と言っていたのですが、やはり受け取らないのです。お金をもらってしまうと「出ていけ」と言いにくいというのが、地主の皆さんに共通認識としてあるようで、絶対受け取りませんでした。ただ、色々作ったものをお届けするという事は、いつもやっていたので、その中でコミュニケーションも出来ていたと思うのですが。

(川原)「そこはフリーにしておきたい」という強い思い、地主だからこそ何かがあるのかもしれないですね。

(塩入) すごく良い活動だったのですが、こういう活動や、あるいは住宅を借りてというケースは今後も結構出てくると思います。そういった時に地主さんとの契約上で、例えば5年間としてやるのか、多分、今回のようなケースの場合には「5年間契約をお願いします」と言ったら、最初から「NO」と言ったかもしれない。例えば泉を残すために水を流すというケースもあって、その土地がどういう土地なのか、土地としてあまり別用途での利用が出来ないような土地であるとか、あるいは市街化調整区域など、いずれにしてもその土地がどういう土地であるのかを、契約上で何か押さえられないのか。例えば500万円という税金を投入したならば、その場が使われていくのが5年間か6年間か分からないですが、それなりの利用をして地域の方に還元をしていく構造でなければいけないと思います。そうすると民地を使った場合には、そこでwin-winの関係が存在していかないと、善意でやっているものというのは個人の色々な事情が発生した時に、地主さんに「契約だから全部犠牲になってやってください」とはなかなか言えない。我々も善意ある地主さんだと提案を聞いていたわけですが、今回のケースみたいなものが、今後も色々な形で出てくると思うので、今回の経験を踏まえて、サジェスションというか、「こうしたら良いのではないか」ということがあれば、お聞きしたい。

(肥後) お話しいただいた様に最初から「5年間の契約で」と言っていたら、成り立たなかったかもしれないというのはありました。でも「覚書は交わす」ということで、期間は設定せずにしたのですが、それについては私たちに不利な契約だったのですが、それはやりながら信頼関係を作っていくしかないとは私はその時思っていました。ある意味、本当に上手くいっていたと思っていたのですが。

(塩入) なかなか難しいということですね。

(肥後) 「もし私たちがまち普請に応募していなかったら、今でも使えていたのかな」と、時々話していたのですが、私たちも「公的なお金を使ってものを作る」という地域の認識が少し足りなかったのかなというのもあるとあって、300万円とはいえ…、私たちにお金が入るわけではないのですが、地域の人の意識も変わったのかなと思うことはありました。「公的なお金を使って、私たちが楽しもう」と言っているわけではないのですが、伝えきれなかったという反省はあります。

(塩入) 色々なものが出てくると、今までゆるゆると使っていたものが、だんだん固定化してしまうということも、地主さんも考えられたのかもしれないですね。

(菅) 色々な私たちが考えるポイント、それはまち普請としても考えるべきポイントがあると思ったところの1つが地主さんとは一体どういう存在なのか。地主さんが一体どんな心情と不安を日々持っておられるのか。こちら側からの断面もあるのですが、そ

の背景には地主さんの不安と心情があつて、まずは「何かやれることがないかな」、「協力しようか」というところがあり、誰が来るのかという不安とか財産に対する不安だとか…。その地主さんといかに協働の関係を結ぶことができるかという課題に対して、審査員も行政も応募して下さった皆さんにおいてもまだまだ研究の余地があるというのが今回の1つの教訓だと思います。簡単に言えば、地主さんの後ろにご先祖様からいただいたとか全部背負っていると思うので、地主さんの過去と将来、それから私たちの描く将来、それをどう重ねることができるかという研究だと思います。

2つ教えていただきたいのですが、1つは今度の保育園の経営はどなたがされるのでしょうか。

(肥後) 経営は民間がやるのですが、地主さんはその土地を貸して建物を建てて、その賃貸料で返済していくということ聞いています。

(菅) そこだけ伺ったら経済という話題に聞こえてきますね。

もう1つは皆さんにおいては1年目、それからまち普請だと5年間という言い方をしているところがありますが、この1年間のみなさんの活動が素晴らしいことは分かったのですが、2年目～5年目の活動のイメージというのが、何か皆さんと共有されているものがありましたか。

(肥後) 拠点ができたので、基本的に畑の運営をしながら、継続的にご飯会をするなどしながらコミュニケーションをとっていくことで、また次の展開が見えてくるのではないかと思っていました。とりあえずはそこまででした。

そこも先ほど話した「ゆるゆるした定着」というイメージで、私は地域に自然が好きな人が増えてほしいと思っていたので、あまり一気に広げていくよりは…。少し話が違いますが、メンバーで今コアになっている人は結構シニアの方たちが多い。その人たちは時間もあるということで日々の水まきとかもやってくれるのですが、もう1つの層としてはご夫婦でお子さんがいたりとか、何か地域のためにと思うのだけど、きっかけがなかったという方が多い。迎える側のメンバーが揃ってくると、子どもたちがいっぱい来ても大人がそれだけいるから結構安心で、そういった構成メンバーでした。先ほど言ったように民生委員とかもやっているのですが、残念ながら全部縦割りなのです。色々な定例会に出るのですが、「ここは町内会の仕事」、「ここは民生委員の仕事」、「ここは社協の仕事」となっていて、本当に届いてほしい人に全然情報が届いていないというのがあります。そういった日々のゆるゆるした中から色々な話が出てくれば、「今こういうこと言っていますよ」とか「口腔ケアの相談所がきましたよ」とかいうこともさりげなく伝えたりできるのではないかと思っていて、より自治会とか町内会に近い役目を補えるかなとも思いました。

(菅) ゆるゆるというお話の魅力をどのように実現に結び付けるかという、その知恵だと思うのですよね。「こうしなければならない」という状況になった時と違う展開の魅力を、想像的展開というのをこの中にもすごく感じます。今回のこういう事態においても、これをゆるゆるどう深めるかということに心機一転するポイントがあるような気がしていて、たまたまエコステーションという名前を付けていただいているから、駅には列車が停まるとすれば、エコバスなのかエコレインなのかがまたここから一回出て、また戻ってきても良いし、まちの中のいずれかのステーションに行って展開を広げていくという、そういうゆるゆる感で、この出来事がポジティブに展開すると

いうやり取りをどこかで見つけていけると良いのかなと思います。とにかくこの冊子があるということはすごい説得力があるので、共感の種になりますから、「次の駅を見つけて出発進行したんだ」という展開で、次のゆるゆるを作っていたらいいと思います。ありがとうございます。

(河上) 大体感想などが出たかと思います。約1年3か月、最後のテーブル作りからが少し短かったので、これが定常化したら、もっと空間的に活動が広がったのだろうなという期待は大きいのですが、空間としての場所は一時お休みになっているのですが、地域に入っていくとか、地域を変えていく仕組みというのが、十分早い段階で出来たという意味で、本当に効果を感じますし、空間としてもこの良い資料で活動実績が目に見えて感じられました。また、5年間の縛りをどうするかとか、民地・民意というところを見ながら活動することの課題など、新しい課題もたくさん教えていただいたので、本当に勉強になりました。ありがとうございます。

まち普請事業では5年間活動団体の皆さんを縛っているのですが、逆に場所が無くても5年間は役所の皆さんがお手伝いしてくれると思いますので、ぜひ私たち部会も含めてこれからも一緒にまちづくりを応援したいし、勉強させていただきたいと思います。ぜひ5年間は少なくとも使いこなしていただければと思いますので、よろしくお願ひします。今日はどうもありがとうございます。

(菅) この冊子は、インターネットとかで出されていますか。すごく良くできているし、例えば、「うちの学校に夏休みだけでも来てくれないかな」という感じで、そういう人たちに対する大変素晴らしいメッセージになっていると思います。他の市民にも、「まち普請事業ってこういう様な場所に縛られない状況での展開があるんだ」という前例となるくらいに開き直って、新しいまち普請のページを作ってもらっても良いのかな。これがあるということをもっと多くの人が共有させていただくことが可能であれば、そんな話もあるかと思いました。

(肥後) もともとエコステーションというのは1つのモデルという提案で、「あちこちでも出来ますよ」という話です。「あちこちで作って、好きなように活動してくださいね」という提案だったので、もちろんそれは共有していいのですが、お子さんの顔が写っているものがあるので、少し間引きして使いたいと思います。引き続きよろしくお願ひします。

(事務局) 今後の展開や、今回の土地の確保が難しいということなどの方向性については、また改めて事務局から提案をさせていただいて、議論をいただければと考えています。

2. 第二次提案書について【資料2-1～2-4】

(事務局) (資料に基づいて、概要を説明)

(杉崎) 主に「整備する施設」、「活用イメージ」、「目指す地域の将来像」が、委員の中では共有していますが、グループからするとこの言葉だけではわかりにくいのではないかという指摘だと思います。資料に補足はありますか。

(河上) 私の意見の2件目ですが、特に私が気になっているのは二次に向けては実現性と、運営面での、それこそ収支計画とか具体的な数字の話が審査基準で多くなること。例えば現行の5番目の費用対効果というところを端的に言っているような項目があるといえればある、「整備計画及びその実施方法」の中の括弧の中に地域資源の注4まで追っ

ていくとお金の話が出てくるのですが、そこは少なくとも審査の中ではもっとウエイトが大きいと思います。特に二次ではそこからかなり実現性とか計画のボリュームとかを計るところもあるので、そこがすごくファジーになってしまったという点で、懸念があります。

(杉崎) 現行の設問 5 が本当は大事な枠だったのではないかということですね。確かに今議論しようと思った「整備する施設」、「活用イメージ」、「将来像」というのは、一次コンテストの審査項目でもある。ここはある程度クリアしているから、一次をクリアしているのであって、若干議論でより詳細化するというのはあっても、ここはあまりポイントではないかもしれない。むしろ二次の判断をすべき項目について、ここでこの書面だけで表現できるかというところで、今の設問 5 の費用対効果というところがあるというわけですね。

(河上) 費用対効果もそうですし、そこでデータに基づき実現性をはかることもあるので、そういう実現性とか費用対効果というのが二次においては結構大きなウエイトになるのではないかと思います。そこがこの提案書を見ると、柔らかい雰囲気の中で見えづらくなっている。提案グループの方が意識しづらくなるという気がする。括弧の中の説明が分かりづらいというのは、フワフワとした柔らかい言葉過ぎるかなという印象です。

(杉崎) 現行 3 番の実現性、5 番の費用対効果というのは結構明示的になっているので、書く側も「そうか、ここを聞かれているのだ」と分かるが、見出しがなくなってしまったことも含めて、少しこちらの意図と違うことが書かれるかもしれないということですね。具体的に言うと、実現性は「関係者の合意・調整状況」というところに移っているわけですね。費用対効果というのが分かりにくいと言えば分かりにくい。

(事務局) 現行の 5 番の費用対効果についての設問ですが、安く仕上げる工夫みたいな回答になっている。そうではなく、例えば 500 万円で整備する内の 400 万円をキッチンに使うとすると、相当キッチンのウエイトが高いわけで、そのキッチンを整備することによる効果を詳しく書くべきところではないかという話で、「整備する施設」の中に、施設の全体像と助成金の対象箇所を明記して、さらにそこでどういった活用をするのかということセットで費用対効果を見ていただければと考えました。

(河上) 先ほど費用対効果 5 番と言いましたが、実は現行 2 番の創意工夫の中にも「工夫をしてください」というところがあって、その 2 番との兼ね合わせでもう少しはつきりどこかに書いた方が良いのではないかと思います。ただ安く仕上げるのではなく、創意工夫と費用対効果の両方の視点から、現実的な工夫というものも分かるようにした方が良いのではないかと。

(杉崎) 一つはコストを下げる工夫という話があると思います。もう一つは、創意工夫は費用だけではないから、それを含めた色々なアイデアが入ってきてしまう。事務局としては、波及効果というか、この事業を通じてどれだけインパクトがあるか、影響があるかという話も費用対効果だということですね。多分、今の費用対効果の中には 3 つぐらいありそうですが、今いくつか入っているものを、分けられないかという議論があったということですかね。

(事務局) 今の費用対効果のコストの話ですが、今回は配布していませんが、これとは別に第 3 号様式で、整備内容何々、それはいくら、そして備考欄があるのでそれはどうやっ

て作るのかを書く欄があります。整備に対してどれくらいの費用がかかっているのか、適正かどうかの審査の判断が出来る用紙は、別途用意しています。

(杉崎) つまり、金銭面のコスト削減については、文章化しなくても予算の見積もりが出てくるから、「キッチンだけで何百万はどうか」とか、ある意味工務店に丸投げして作ってもらうのか自分たちで労力を出すのか、その予算の見積もりで読み取れるのではないかということですね。

(河上) そこに至るストーリーがコンテストでは大事なのでそれを書く欄、整備する施設と企画した後それにいたるストーリーというかプロセスを期待するところがきちんとあってほしいです。それこそ収支計画は少なくとも数字だけ作って、それとは別にテキストだけ作ってと、分離してしまうと困るので、そこを結びつける何か…。

(事務局) 整備計画の部分がそれに当たります。

(河上) それが工夫しているという様な感じではあまりとれない。

(杉崎) 「つくるときに連携する仲間や活用する地域資源に触れて説明してください」というところで、「色々な人的資源を使いながら」という工夫が書ける、それが分かりやすいかどうかはともかくとして、意図としてはそういうことですね。項目を抜いたというよりは、ここで書けるのではないかという話ですね。

(塩入) 現行の費用対効果ですが、何をもって費用対効果というのか。例えば全体としてみると費用対効果はもちろん重要だけど、500万円投入してもっと価値を生み出すものが費用対効果ではないか、それも公共性という観点で価値を見出すのかという効果。しかし、実際にここで書いてあるのは、「何を提言しました」という話であって、本当の費用対効果ではない気がしています。ですので、ここは費用対効果という項目と中身とは少し違うなという感じです。そこは「整備計画及び実施方法」でむしろ仲間の資源をどうやって使っていくかということであって、費用対効果というのはもうちょっと全体的に広く書くという感じがしました。

(杉崎) プロセスについてはこの整備計画のところで、整備していくところのプロセスは書いてもらう。ここで数字の両方を見ると、コスト削減の工夫ではなくて、みんなで作るというプロセスが表現できるということですよ。

あとは目指す地域の将来像の話になるかもしれませんが、「整備をすることで地域がどう変わっていくか」が将来像で良いのかという、この辺りが川原委員のコメントも含めてあるのでないかと。あと言葉の選び方の問題もあると思います。

(川原) ストーリーと言われましたが、整備する施設も一般の方が書くと、目的もはっきりせず、「これを作りたい」だけ出てくるような感じにも思えたので、改めて活動の目的が先にあって、それを実現するための施設整備であり、必要な機能ということを明確化の方が良いというのが、私のコメントの趣旨です。

(杉崎) 活用イメージと目指す地域の将来像というのを書き分けるのは意外と難しいかと思えます。将来像は少し先で。どの段階までが活用イメージか、つまり施設整備をして、ここでどういうことをやるのかという話が活用イメージですね。それを通じて地域がどう変わるかという、より抽象度が高くなるのかな、ここを書き分けるのは難しそう。

(事務局) アクションプランとビジョンの違いのような。

(杉崎) 目標と目的の話がよくありますけど。世界平和のためにこれをやるというぐらい

の段階の違いというか。

(川原) そういう意味では、どこまで細かく書くかなと思ったのですが、活動の全体像と言っているのは、例えば1日か、1週間か、1年かはわからないが、そこを具体的にイメージできれば。ここは活動の全体像であって、将来像というのはそれを通して全体として地域をどう良くしていくかという話で、活用イメージと言っているところが、今の事務局案だと「どのようなことを行いますか」とありますが、このままだと将来像まで書いてしまいそんな感じもあるので、むしろここは「日々の」を入れて項目で書けると良かったと思いました。

(杉崎) 上の設備整備もそうですね。「500万で何と、何と、何を作る」と言って欲しいわけですね。つまり、「みんなが元気になる施設」と書かれても困る。あと、提案の背景と目指す地域の将来像も対になっているような気がしますね。

(塩入) 書く側にしてみると、例示があってサンプルがあってそれを見て、ここが「何を言わんとしているのか」を解釈しながら書いていかないといけない。この文章だけではどう書いて良いのか、色々な書き方ができてしまう。イメージを明確化するには、それを上手く作るということかという気がします。

(杉崎) 確かに、括弧内が「どのような」という表記は意外と分かりにくい。「どの」というのが、1番は「具体的な整備項目を挙げてください」ということですね。「どのような」の書き方が分からない。例示するというのも一つですが、こちらが知りたいのは「何と何と何を整備する」ですね。次も「整備する施設でどのようなことをやりますか」だから、「整備する施設で行う具体的な活動を書いてください」とか、そんな書き方でしょうか。

(河上) 細かい点で申し訳ないですが、一次と二次の大きな違いは、「実現する」ことに關して、より担保できる情報が欲しいということです。イメージの段階は一次じゃないかと思えます。だから、なるべく具体的なことを書いてもらえるような書き方をしてほしいと思えます。

(杉崎) 「整備する施設」、「活用イメージ」、「背景」、「目指す地域の将来像」は、一次と同じ文字が入っていてもいい。むしろ大事なのは、整備のプロセスをどうするかや、整備計画から維持管理までは、少なくとも二次ですね。

私は一次から二次の間の活動も評価したりしますが、それはどうしますか。一次から二次の歩み方というか、そのプロセスについて。

(事務局) 一次で書いていたことと、二次で書いていることで比較はできますが…。

(杉崎) そうでなくて、一次から二次の活動報告、「こういう風にワークショップやりました」とか、「地域の人と話し合いました」という内容。

(河上) 一応、懇談会でそれは出してもらおうことになってはいますが、また懇談会の後に色々ありますよね。

(事務局) 一次から二次の活動については「その他、PRしたい点」であるとか、あとはアンケートをとったりというところは、提案背景として書いていただけるかとは思いません。

(杉崎) 委員の皆さんが二次審査で実現性を含めた審査をするときに、この項目を埋めておくだけでは審査しにくいという点を挙げていただけたらと思えます。「こういうことを項目として必須で入れておきたい」とか、そういうことですね。あとは「目指す地域

の将来像」という枠のところは菅委員と川原委員、もう少し言っておきたいことがあれば。

(川原) 例えば活用のイメージというところで、どういう例示をするのが大事なのかという、例えばなるべく実現性を担保したいというのであれば、それぞれの項目をどういうことを書いてほしいかを例示しておくことが良いと思います。例えば、誰がどういう役割を担うのか、メンバー構成と対応させて書いてくださいとか。

(杉崎) それは「維持管理・運営計画及びその実施方法」という項目の想定だろうと思います。つまりここにそういうことを書いてもらえるように、促すように少し補足することですね。つまり河上委員の話は、前半部分の話は一次で聞くことで、むしろ二次で聞く実現性の部分の後ろのところがこの表現で良いのかどうかと。まず大きな論点として2つあって、前半は極端に言えば一次コンテストと同じ内容でも良いかもしれない。後半の「整備計画」から「維持管理・運営」というあたりが、ここが審査するときに大事なポイントになるかなと。そして「維持管理・運営計画」のところは川原委員の言われたように、これだけで書く側が書けるかどうかということですよ。

(川原) 今、議論していて「そういう意味なんだよ」と言われれば、書けると思うので、その意味では合っているという気はすると思いますが。

(杉崎) ただこれだけ項目があると、書き分けに苦労するなという気が少しします。いずれにしても整備計画と維持管理つまり整備できた後のことと、2つ枠があるわけですが、これだけで十分なのかということと、あと表現がこれで適切なのか。適切というのは書く側がこれでこちらの意図通り書いてくれるのかどうか、ということですが。

(川原) 書き分けるのは難しいかもしれないけど、重複でも書いてくれれば良いと思います。書いてほしいことが書かれていない方が困ります。そういう意味では、どこのところにも具体的な整備の内容との関係が書かれている、どうしてもそういう文章になりますよね。それでいいと思っています。

(杉崎) 枠が大きいと、たくさん埋めなくてはいけないと思いますね。書かれる側の立場からすると、背景とか埋めなくても良いのかなと。むしろ実現性の整備計画とか維持管理の枠を大きくした方が、こちらの方が大事なんじゃないかと思うかもしれません。テクニカルな話になります。

(事務局) 実際は3ページ以内で、枠の幅は調整して書いてきます。

(杉崎) 何か意図がありそう、と感じないでしょうか。

まずは項目がこれで妥当かどうか、過不足があるかどうかという話と、表現がこれで適切かどうかという話ですけど。過不足は河上委員、いかがですか。

(河上) 今まで発言した通りです。

(川原) 実現性が問われていることを、様式の冒頭付近にでも書く。どこでそれを表現しやすいのかはグループによっても違うと思うので、「二次の審査で重要なのはこういう項目なので、そういうことが説明できるように各項目の中で、出来るだけ表現できるようにしてください」とか、もっと大枠のところではいいと思います。

(杉崎) 今年はともかくとして、費用対効果という表現はいずれ変えた方が良さそうですね。コスト軽減するという話と、これをやることのインパクトが大きいという話の両方が今入ってしまっています。我々がどう捉えるかということもありますが、これを出しているから、この項目で私たちは審査をするわけです。その時、「費用対効果って

何で審査するの」とか思いますよね。

(川原) 費用対効果について今話されてきた様なことを提案グループに説明していますか。
(事務所) 説明しています。

(杉崎) 「地域まちづくりの発展性」というのが悩ましいですね。これは「目指す地域の将来像」でしょうか。

(事務局) そう考えました。

(塩入) これは悩んで考えると思います。何かを作ることを考えている人が、例えばそれができたことで地域が変わっていくのかと問われたときには、すぐに書けなくて意外と考えると思います。それは我々が判断するというのですが、例えば「コミュニティカフェを作ります」と言ったら、カフェを作ることだけがあるわけですが、それによって派生効果、地域にどんな発展があるか、課題解決に結びついていくのかを考えなくてはいけないということは、あまり考えていないですよ。

(杉崎) ここの例示が「コミュニティが広がる」とか「地域まちづくり活動が活発化する」と言うけど、別に広がらなくても課題が解決したり、色々な波及効果ってあるような…。ただ、やみくもに広がれば良いわけでもないし。ここの表現はこういう書き方でいいのか。例えば「整備によって地域がどう変わるのか」であれば、よくなっていくことを書けばいい。そうすると提案の背景と対になってしまうかもしれないですね。

(河上) 議論が拡散する方向に発言しても良いですか。今、杉崎部会長のお話を聞いていて、それから前からかなり思っていたことですが、まち普請の評価基準の解釈の仕方が変わってきたなと感じています。変わってきたので言葉に対する理解というのが部会の中でのそれぞれの方、もちろん違いはあって良いのですが、だいぶ変わってきたというのが私の率直な感想です。良い悪いという意味ではなく、初めのころは部会長が建築のデザインが専門の方だったので、まちづくりではあるけど、行政が行う地域の環境整備ということだった。例えば現行の2の「創意工夫」はデザインに対して注目していた。「ハードのまちづくり」ということに結構主眼が置かれていたのですが、その後部会長もその方の専門性も替わっていき、杉崎部会長になってはっきりと「施設整備をきっかけとしたまちづくり」と言うようになったと私は感じています。それで今の枠と合わなくなってきている、そういう意味では評価基準の言葉というのもすごく変わってきていると感じています。色々経験を積んだ上でここまで辿ってきているのでこの方向で行けば良いと思いますが、ここのギャップを今後、丁寧に考え直す必要があると思います。それをやった上で、この書類にも反映すべきだと思いますが、今日詰めるべきことなので、私の発言は近い将来考えるきっかけがあればという程度に考えていただきたいです。そもそも最初作っていったものと狙っていたものが合ってきたと思う。その中でコンテストの中でかなり突っ込んで議論される視点も変わってきているなと感じています。

(川原) 今の発言で改めて気づきましたが、一次の時の我々のコメントの中でも、デザインは大事だと思っていて、私はそこをコメントしていたつもりですし、河上委員も菅委員もしてくださっていましたが、その言葉が外れてしまったというのは確かにあります。それはどこかに入れられると良いと改めて思いました。

(杉崎) それほど外しているつもりはないですが。デザインというのは見た目だけではなく、どういうアウトプットを議論するかということも含めてですよね。それが既製品

を持ってくるという話じゃなくて、その機能をどうするかということも含めたデザインと考えればそれほど外れていないと思いますが。谷矢部池公園のプレハブゾーンみたいなものでは、見た目のデザインも議論しているわけですよね。審査基準にも入っていますか。

(事務局) 創意工夫のところに入っています。アイデアのユニークさであったり。今の話は最初の「整備する施設」というところで、デザインも含めて「どのような施設」としてありますが。確かに「フワッとした」書き方になっているので、もう少し具体的に書いた方が良いかもしれません。

例えばですが、杉崎部会長が話されたアイデアやデザインへの配慮みたいな話を、「整備する施設」に入れるとか、また次のページの「その他提案について特にPRしたい点」といったところにも、この取り組み自体の創意工夫を書きただけのようにすることもできるかと考えます。

(杉崎) 例えば湧水のところが、ただ買ってきたスノコが置いてあるとか、コンクリで固めるとかではなく、議論した末にデザイン面や配置で考えたことを書く項目がないということですかね。そのような工夫を「整備する施設」で書いても良いが、前半はどちらかと言うと一次をもう一度追求する感じなので、整備する施設のデザインとか機能の工夫などをあえて書く枠を作るか。それをPRの中に納めてしまうのは、あまりよくないと考えます。

(事務局) むしろ整備する施設に書くよりは、デザインなどを含めて具体的に記載する枠を作ると、よりよいと。

(杉崎) 「整備する施設」の項目で書くと、「テントを建てて、水洗を作って」となるけど、それだけじゃなくて、機能自体にどういう工夫があるかということを知りたいというか。

(事務局) 「それを含めて記載してください」と書くことで、平板にもものを作る内容だけではなく、そこにある創意工夫やアイデアも含めて、より具体的に書いてもらえるようにするということですね。

(河上) 今の事務局の提案が良いと思います。そうすると現行案の助成金の金額や対象箇所なども明確になるので、上手く紐づけて読みやすいかと思いました。なるべく項目の数を減らすか、分かりやすくするかした方が良いと思います。

(杉崎) 設備もそうだし、活動もそうだし、どういう特徴があるのかというのを書いて、PRしてもらおう。

(塩入) 私は事務局案で良いと書きましたが、実現性の部分では収支が成り立つのかという議論がいつも出ていて、我々もいつもチェックしていたわけですよね。整備はできる、しかしそんな家賃で成り立つのかというようなことを、結果的には質問で書いていった。それでみんな返答を出してきたのですが、それであれば「維持管理・運営計画及び実施方法」というところに、収支を入れておいた方が良いと思います。

(杉崎) どういう風を書くかですね。「家賃がいくらでそれが払えるのか」ということを具体的に書くのか、こちらとしては、例えば「新築の1フロアを借りてどうやって回すのか」ということが、話題になるわけですね。

(事務局) 今までは収支の計画書に類するものは、その他資料で出てきていました。

(杉崎) 最初の整備事例によって書き方が変わるので、フォーマットを決めるのが難しいかもしれません。そういう情報が欲しいということで入れていますね。事務局案をも

う少し充実させた方が良くという議論になっていますが、いかがでしょうか。

(事務局) 塩入委員の今の維持管理のところをより具体的にというお話で、より整備・管理・運営における創意工夫とか具体的な事例を求めるといった表現を入れることで、それをPRポイントに含めて、その中に入れるということで、いかがでしょうか。

(杉崎) 施設の整備の前の具体的なことと、工夫をしている点と活動イメージですね。整備した場所でどういう活動をするかということも、具体的な「こういう工夫があります」ということを入れてほしいと思います。

あとは、「目指す地域の将来像」のところ。見出しが良くないということになっていますが。「整備を通じてまちがどう変わるか」ということを書いてほしいわけですが。「将来像」ぐらいぼんやりしていた方が書きやすいのでしょうか。

(鈴木) 私は「目指す地域の将来像」は最後にしてほしいと思っています。色々な具体的な実現計画というか推進していく方法を述べていって最終的にどうなるか。そこが究極の目的？目標？になるので、順序が気になります。

(杉崎) 今の段階で確認をしましょうか。事務局案ベースで、「整備する施設」については具体的な整備内容と創意工夫があるということを書いてください。次は「活動イメージ」で、その整備した施設で行う活動について具体的に示すことと、その創意工夫。次の「提案の背景」、これは一次提案書に書いてあることでも良いから書いてもらうことですね。次は「目指す地域の将来像」というか、「整備によって地域がどのように良くなるか」といったことでいかがでしょうか。それを一番後ろにした方が良くという意見が鈴木委員からありました。次が実現性のところで、「整備計画及び実施方法」は「整備のプロセス」と言うのが難しいでしょうか。「誰とどのように、どのようなスケジュールでどんな人が参加して整備しますか」ということが聞きたいわけですね。

(川原) ここは整備に向けてのプロセスと役割分担みたいな話ではいかがでしょうか。

(杉崎) 計画及び実施方法というよりは、「整備のプロセス」と書いて、「スケジュールとそこに関わる人がどのような役回りをするのかを書いてください」とかでしょうか。「維持管理・運営計画及び実施方法」は整備後の維持管理・運営。これは地域資源とかに触れますか。維持管理・運営に関わる人と役割があれば良いのではないのでしょうか。

(川原) 地域資源ってヒト・モノ・カネですね。

(杉崎) ヒト・モノ・カネ。運営の時にやっぱり大事でしょうか。大事ですが、また書いてもらうかどうかですね。どうですか。「その他PR」はいるのかどうか、自由記述という意味で残しておきますか。

(川原) その他提案PRのところ、先ほどの一次から二次の間にできたこと、ということがあると良い気がします。

(杉崎) それもそうですね。それ、早い段階で書きたいような気がしますけどね。

(川原) 他で書き出すと、埋まらないような気がしますね。ここでまとめてもらった方が良いでしょう。

(杉崎) それだけは様式は別で書いてもらっても良いですね。一次コンテスト後の活動報告として。提案書とは別に「何月にワークショップやりました。誰が参加しました」とか。

(事務局) 例えばここには一次から二次に向けて行った取組を書いていただいて、「様式は問わないので何かつけてください」というやり方もあるかもしれません。

(杉崎) 近隣との合意形成とかそういう話だけなのか、もう少し広い話になってくるのか。関係者の合意調整状況など、そういうプロセスに参加することも含めてなのか、町内会にあいさつに行きましたとか…。どうでしょうか。

(事務局) 例えば「自由様式でつけても構わない」とする、あるいは、ここに書いていた上で、「補足するような資料があったらつけていただいても構わない」というやり方もあります。あとはそれを必須にするか、任意にするか。

(杉崎) 活動助成金も渡しているのです、その報告ということで必須でどうでしょうか。

「設計及び設計整備のスケジュール」を見落としていますね。先ほど、整備計画のところ、スケジュールと役割の話をしてしまったので、とってしまえば良いですね。

(事務局) 今のところで1つ細かいですが、「注4」で「ヒト・モノ・カネに触れて整備計画を書いてください」としていますが、この部分は残しますか。

(杉崎) これは手掛かりになりますよね。これは分かりやすい地域資源の話ですね。「みんなでワークショップやりましょう」というよりも、「誰誰に協力してもらってきました」という話なので、両方欲しいですね。

(川原) 話をもう一度戻すようで申し訳ないですが、最初の「整備する施設」のところは、ハードに絡めて書いてくださいという話だったかと思いますが、先ほど「創意工夫」という言葉がここに入っていました、が、「創意工夫」だけだと、なかなかデザインにまで発想が届かない人が多いのではないかと思いますので、「デザイン」という言葉を入れるか、「空間的な特徴」とか、そういう言葉を入れてほしいです。例えば欄外にでも「創意工夫とはこういうことです」など。

(杉崎) 「設備・配置・デザインなどの創意工夫があれば書いてください」といった形でしょうか。例示の仕方とか。創意工夫と言っても、「何を」創意工夫したのか。

(川原) 機能の話と一般的な特徴の話とですかね。

(事務局) 「デザインや特徴など」といった形でしょうか。

(杉崎) デザインだけでもないというか。

(河上) 現行案の「2 創意工夫について」の格好内に書いてあることは、どれも重要なことではないでしょうか。発想も大事だし、方法も工夫して。

(川原) 先ほどの地域資源のところでは、欄外に「資源とはこういうものです」と書いているように、「創意工夫とは、例えばこういうものです」。それで現行案で「創意工夫」で書いてある内容がそれを示されているので良いのではないのでしょうか。

(杉崎) これでまた、一度作り直していただいて、メール協議としましょう。

3 平成 30 年度活動懇談会について【資料 3-1~3-2】

(事務局) (資料に基づいて、概要を説明)

- ・ファシリテーター役を置かないことについては、提案グループが主体性を持って話してもらうことで、自分たちの課題により気づきやすくなるという想定によります。

(杉崎) このステップアップシートは、先ほどの二次の提案書より分かりやすくて良いですね。この流れで良いのではないかという気がします。

懇談会については、主には進め方について2つの提案がありました。懇談会の目的は、提案グループは悩みがあれば先輩も含めて悩みを相談することと、あとは、この先のプロセスのイメージがなかなか分からないから、「二次までにこういう風にやっ

く」というスケジュール感を確認するということでしょうか。その目的に立った場合に、どちらの案が良いか。

アドバイザーというのは整備済みグループで、従来型の案だとテーマが似ているところに合わせて重点配置する、しかしその場合、湧水に関するグループが、親子カフェのグループにもコメントするというところが違いがあるということですね。

(塩入) 昨年の懇談会では、今までと違って、私たちは色々細かい議論に対してほとんど何も言うことがなくて、私がいたところは、先輩グループが「スピードをあげなくてはいけない」とか、「こういうところが足りていない」とか、様々なサジェスチョンをどんどんしていたという状況でした。

それに対して、2つの案が出てきたというのは、問題になっているのは「自分の会場だけしか見れない」ということだと思います。そういうことであれば、基本的には前回のパターンはそのままにして、最初に皆さんにステップアップシートの①を簡単に報告してもらって、その後は前回スタイルが良いと思います。そうすれば、他のグループがどんなことをやっているのかが見える気がします。

(杉崎) つまり前回のやり方で、最後に交流タイムもあるのでということですね。交流タイムで、最初の組み合わせと違う組み合わせで話せるということですね。前回良かったと思います。あと、テーマに沿って先輩が寄り添うというのはすごく良いような気がします。

(川原) 案②の方はゆっくり話せない感じがありますね。

(河上) 資料13 ページの案②に「同じ会場以外の委員の方からのアドバイスや、提案グループの話も聞きたかったという声がある」とありますが、具体的にどれくらいの量がありますか。結構ありますか。それとも去年はそのような声があったのか。

(事務局) 毎年あります。

(杉崎) それは案①の交流タイムで解決することもあり得るのでしょうか。

(事務局) 逆に昨年の交流タイムで委員の皆さまはどの程度他のグループと話げできたかご意見としていただきたいです。例年、あまり部会で活動懇談会の振り返りまでできないことが多いので。

(河上) 私の例年の印象は、昨年度に限らず、OBの方が2団体入られて、その方々の発言が非常に有益だと思っています。委員に回ってきたら発言しますが、だいたいOBの方と提案グループの方とのやり取りで、毎年いい議論をしているのではないかと考えています。そこのマッチングを上手くやれば、形式はどちらでも良いというのが率直な印象です。もしかすると交流タイムでは、委員には話をしやすいけど、別の団体の方と話すことの方がハードルが高いという気がします。

(杉崎) 案①の方が深くやり取りできるかと思い、私は案①が良いと思います。他の委員等とのやり取りは、交流タイムがありますし。むしろこれまで若干固い感があったので、今回は机をくっつけて提案グループが緊張しない雰囲気になれば、案①のやり方で出来れば良いかと思っています。

(河上) 提案グループの緊張という意味では、緊張はしてないけども、審査員と本音で懇談してもらおう場なのに「きちんと回答する」というか、隙を見せない回答をすることに尽力されているグループがいます。例えば、コンテナハウスを作ったグループも、ずっとその部分を聞いているのに、「これでいくんだ」という揺るぎない想いだけを伝えられ

ると、懇談会の意図が違う方向になってしまう。素直に悩みを共有して、二次コンテンツにどうやっていくかという相談の意図を、提案グループでも確認していただいて。

(川原) 私たち委員はいらぬですね。

(河上) そうですね。相談しなくても良いかというくらい時はあります。作戦タイムというのか、そういうイメージで来てほしいと思います。

(川原) あまり活躍の機会はなかった気もしました。去年初めてだったので良く分からなかったのですが、ここで審査員がアドバイスをするということが、「この人はこういうから、これを受け止めなければいけないのではないか」と、とられてはいけないと思って、コメントがしづらかったです。そう思っていたら、先輩グループの方が色々アドバイスをしていて、良かったと思って、割と静かに聞いていたという感じでした。

(河上) あと、私は去年ファシリテーターの存在が良かったなと思っています。先輩グループが、今の提案グループにかなり厳しいことを言う場合もあって、「それでは絶対ムリ」みたいな…。「それでは、それを緩和するためにはどうしたらよいでしょうか」ということをファシリテーターの先生がユーモアを交えて上手く聞いてくれて、そういう存在は私は良いなと思いました。

(塩入) 今回の提案の中では、ファシリテーターが無しという話でしたが、案①もファシリテーターはなしですか。

(事務局) そうです。

(河上) それはコーディネーターとか、地域まちづくり課の職員が入ることになるかと思って、資料を見ていましたが、進行はしますか。

(事務局) 初めの口火は、地域まちづくり課の職員が切ります。ファシリテーターを置くとアドバイザーも提案グループもどちらもお客さんみたいになってしまう。ファシリテーターの方が主役というか。進行が上手いので提案グループの聞きたいことを、とても引き出してくれるのですが、提案グループがより課題意識を持って自分たちが聞くという場にしたいという意図で、今回はファシリテーターを置かずにやってみたいと考えています。

(杉崎) 置かないで上手くいく場合もあるが、「市役所に呼ばれてきたら今日何の会だろう？」といったグループもありますよね。その場をうまく活かさないグループがいるときに、ファシリテーターが進行を手伝ってあげると良い場合もあるし、やらなくても良いなら黙っておく…。その辺を地域まちづくり課の方が、上手にかみ合っていない部分に進行のサポートをするっていう、まさにファシリテーターですけれども。やはりいた方がいいのではないのでしょうか。

(河上) あとは、外部の専門家の先生方だったので、「審査員の本音もこの場だから言ってしまう」といった引き出しもできて、そういう部分も良かった。本質的な議論には結びついた気はしました。

(杉崎) ファシリテーターはやはりつけた方が良いのではないかと、今はどちらかと言うと案①が良いのではないかとこの流れですね。緊張をほぐすために机を近づけたりするということ。

(河上) でも、ある程度必要性を感じているから、案②というのを出されてこられたのですよね。

(事務局) 昨年、一昨年と提案グループから、「別の会場の先輩グループの方とも話したかつ

た」という声もあったので。

(杉崎) 交流タイムで「今日はこういう人が来ています」と紹介をして、名札など交流しやすい工夫が出来れば良いのではないのでしょうか。

(川原) 交流って特に仕切らないものでしたでしょうか。我々も含めて、テーブルに札があって、「あの方のところに行こうかな」と、主体的に選んでいけるようになっていたら、そういう交流が満たされる気がします。

(杉崎) お互い分かりやすい名札がついていると良いですね。

(河上) あと、先輩グループの方に交流タイムでも他のグループからの相談を受ける可能性があることを、そういう役割があるということをおかないと、いなくなる場合も結構多いかと思います。そこは少し注意が必要ですね。

(杉崎) 交流タイムは打ち上げではなくてプログラムの中に入っていることを伝えていただいて。例えば違う名称にするとか。

(河上) そうしないと、先輩グループの方が、結局全部聞きに来たところだけ答えるということになってしまうかと。

(杉崎) 聞きやすいように名札をつけたりとか、あとはプログラムに入ってる時間であるとか、というようなことを工夫していただくということで良いのでしょうか。

(菅) 今、どういう議論しているのかよく分からないんですけども、どういう議論をしているのでしょうか。

(杉崎) 今、案①と案②が提示されていて、従来型の案①で良かったのではないかという話が出ています。ただし同じ会場のOBグループや審査員とやり取りができないというアンケートの結果があったので、それも織り交ぜる方法がないかということで、案①の交流タイムを上手くやれば、OBとの細かいやり取りもできるし、自分のグループ以外の人とも交流もできるので、去年の改良版でいってはどうかということに至っています。

(菅) せっかく案②を出してもらった趣旨をもう少し確認した方が良いかと思いました。それがよく分からなくて、「あっちもこっちもどうにかしましょう」ということで、どうにか納めていくという話をしているのかと思ひました。

(杉崎) どちらかという、去年の案①で良かったのではないかという話があったので、去年の課題を改良することで対応できるのではないかという話をこれまでしてきました。

(菅) 良かったことと、いけなかったことをはっきりさせた方がいいと思います。

目的のところを書いてあることでは、登場人物が見えない。もう少し明確に言えば、タイトルが「一次コンテスト活動グループ活動懇談会」となっていて、そして、去年はここで登場していた人たちがここでは登場しない、つまりファシリテーターをどう扱うかの判断を分けていますね。今年は登場いただくのはやめたらどうかという提案ですが、河上委員からは「役割があった」という話がありました。その点は今どういう議論になっているのでしょうか。ファシリテーターの存在に関して、何が良いところがあって何が課題なのかを聞かせていただきたい。

(事務局) ファシリテーターを置くことによって提案グループもお客さんになってしまっているという印象がありました。この活動懇談会は提案グループが活動を進めるにあたってのものなので、提案グループが自ら課題意識をもってこれからの活動を行っていくために、自分たちが聞きたいところ、分からないところについて先輩グループな

り委員の皆さんなりにアドバイスを受けるということで、ファシリテーターを置かない方が良くと考え今回提案をしました。

(菅) とても重要な提案だと思います。まさにこの日は何のためにあるのかに関わる重要な提案だと思います。そこを大切にするためにいくつか選択肢があるかもしれませんが、今言ってくれたのは「通過グループにとって」というところを第一に考えたいということですね。その時に一番合理的な判断の選択肢は何なのかという整理を議論の中でしていただかないと、せっかく良い提案だと思っていたのだけれども、それがスッと流れてしまっていて分からなくなっていました。タイトルで言えば「提案グループ活動懇談会」ですよ。

(事務局) 提案グループが活動していくにあたっての懇談会です。

(菅) これまで活動してきたことの懇談会、それともこれから活動していくにあたっての懇談会ですか。

(事務局) どちらかと言うとこれからの重きを置いています、これまでの活動も振り返っていただく。

(菅) そうすると「懇談したい」という気持ちを持っているのは、通過した人たちであってほしいということをイメージしていますよね。それはすごい大切なことだと思います。その点で、今どんな判断があるのかという整理を議論でしないと、今の議論は私にとっては良く分からなかったです。

極論ですが、これをやらなかった時とやった時でどう違うのかということが、「これまでやってきたから、やりましょう」という考えもあるかもしれないが、それで狙ってる目的だとか去年まで得られた成果だとか、もっと行けるのではないかということを見越したうえで、今の議論の終着を作れば話が終わると思います。

もとより、やった方が良くかについてはやったほうが良いと思うのですが、ただ「やってくれるんでしょ」とお客さんとして来られたらもったいないという話は、先ほど杉崎部会長が話された通りだと思います。ではどうするか、というのがこの議論の一番重要なところだと思います。

(事務局) 去年からステップアップシートを作ることで、提案グループに今後の活動の見通しを事前に考えてきてもらうということを始めました。それによって提案グループは先のことを考え、整理したうえでこの懇談会に臨めるようになったと思っています。ただ、ファシリテーターを置かないというリスクも確かにあると思います。実際、去年もテクニックばかり聞いたがって、本質のところの議論に入れなかったところも少しありました。ファシリテーターを置く置かないは一長一短それぞれあると思っています。ただ今年度は事務局もこの活動懇談会に臨むにあたって提案グループに「自分たちで聞いていってください」と働きかけていこうと考えています。

(菅) 働きかけられた団体はどこに自由度というか、自分たちの意思によって参加できるステージがあるかを認識できているかが重要かと思いますが、「10分あげますからどうぞ自由に使ってください」と言われているのか、「こちらで設定しているものに意識をもって臨んでください」ということぐらいしか言われていないのか。その違いによっては「10分間の進め方から考えていこう」と思えるか、「言われたことに対してアグレッシブな精神でいこう」というぐらいなのか。このプログラムのどちらかを選ぶということは、どちらかと言うと「気持ち前向きに来てくださいね」というぐらいの感

じと思います。もう一つ「この10分をあげますから」という思い切ったやり方、最初に話した大切にしていることをからすると、もう少し過激な選択肢もあるかと思いました。

それと、誰がまちづくりコーディネーターとして入るのか分かりませんが、この時にはマッチングは終わっていますか。

(事務局) 8月中には終わっている予定です。

(菅) そうすると、提案グループとまちづくりコーディネーターと先輩グループと審査員と行政とファシリテーター、たくさんいますね。

(川原) 今の菅委員の話で思いましたが、このタイトルは懇談会と書いてあるけど、二次に向けての相談会ですね。そうだとしたら、「こんなことが相談できます」、「こういう人たちがこういう相談を受けとめられます」、「先輩の人たちにはこういうことが相談できます」といった例示があってもいいとも思います。あるいは「コーディネーターにどこまで、どうサポートしてもらったら良いか分からない」ということもあると思うので、そんなことも相談できますとか、今までの経験の中から「こういう質問をしていた」ということを拾い集めて、先に提案グループの皆さんに提示してもらえると、「そういうことも相談できるのだ」と主体的にこの会に出てきていただけたらと思います。それがあれば案①でも案②でもいけそうな気がするのですが。

(菅) 今言ってくださった名前はとても重要で、「相談会」はストーンと落ちました。そちらだとかなり面白いと思います。主体者が相談したい人というのが見えてくるとと思います。

(河上) 先ほどの「10分を自由」というのは面白いと思います。積極的に使ってもらえるので。しかし、相談したくない団体はどうしますか。欠席もありですかね。

(菅) 欠席もあると思います。

(河上) コーディネーターとの関係についてですが、過去を振り返ると、表では相談しにくいけど、関係が思っている方向性が違うということがあったという話を聞いたので、本当はそういうところも相談できると良いですね。

(菅) コーディネーターと上手くいってないというのは。

(河上) 「俺たちはこっちをしたいのに、先生はこっちって言うんだよ」みたいな。立ち話的に聞かされて何と答えたら良いのか。こういうところで顕在化して行って、しっかり前向きに解決できると良いです。確かにその辺りで上手くいかなくなって、計画があまりまとまらず、途中で断念された提案も過去あったと思います。それが一番の理由で断念したわけではないのですが。

(川原) そういう意味では「今抱えている悩みを持ってきてください」といったように伝える。それをセッションという中で皆の中で話せるような相談のものと、少し相談しづらいものもあると思うのでそういうものは交流タイムでというのはありそうですね。そういう役割はあるかもしれないです。

(塩入) 大昔ですけども私は「何で行政に呼ばれなきゃいけないんだ」と思って参加しました。まちづくりコーディネーターの体験で感じたのは、今何をやってきて将来何をやるのか、どんなスケジュールでやるのかということ、一番考えてもらいたいわけですね。二次に向かって何をやらなければいけないのか。最近レベルも高くなってきて、かなり詳細に「二次に合わせてどういうことをしないと選ばれないのか」ということ

を、一生懸命に聞いてきます。

それと、アドバイザーになっているグループの方にも感心したのですが、私みたいな人が説明しても「たぶんそれではダメだ」、「こうしないとだめだ」、「ここが足りない」と言ってくれる。そういう相談の意識で来ていない人がいたとしても、「これでは通らない」と言ってくれるというところが、つまりアドバイザーが一体何を期待されて、この場に呼ばれているかの意味をしっかりと押さえてきてくれる、そういうグループを選んでくれれば良いと思っています。そこがポイントだと思います。

とは言いながら、話が上手くいかない、どう展開していったらよいのか分からないというところになると、少しコーディネートする人がいて、最初だけ上手くスタートさせて、変な方向に行ったら若干調整する程度で、後はアドバイザーのグループがしっかりしていれば結構色々なことが聞けると思います。

(杉崎) 私、今2つ思ったのですが、1つは「相談して良いという雰囲気を作る」。審査員に見られていると思うと、本当に悩んでいることを言えなかったり、「ウチは順調です」と言ってしまうようなことにならないようにすること。もう1つは、相談のニーズだけに答えるのではなくて、ベテランの人からのアドバイスは結構気付きになるので、おせっかいかもしれませんが、その組み合わせも大事だと思います。だから、去年の形でも良いと思います。あとファシリテーターですが、やらなくて済むのであればいいけど、「ワッ」としゃべり始めてしまうとその時に少し調整するくらいの感じがよいかと思っています。上手く議論しているときは別に何もやらなくて良い。

(菅) 昨年までのようなファシリテーターは、いなくてもいいのではないですか。役所がこのシステムの中で、実際団体にずっと入ってくださるわけですね。審査員ではないから審査権限もない、でも事情をよくわかっている行政職員の方々が入っているから、変なことになるのは、稀有な状況だと思います。審査員を行政がやらずに市民がやっているこのシステムであるのならば、行政職員の方がファシリテーターを十分していただける能力と立場を持っていると思っています。

(杉崎) 私の先ほどの発言の趣旨も同じです。別途ファシリテーターを入れるのではなくて、まずい時には事務局が話割りに割って入るくらいで良いのではないですかということです。

(事務局) 事務局としても今回試みとして、昨年度のようにファシリテーターをお呼びするのではなくて、地域まちづくり課の職員が入っていますから、菅委員のお話にあったように、もし何かトラブルがあったり、話が流れなくなった時には、行政の職員が少し軌道修正をするというやり方で提案させていただきたいと思っています。

(杉崎) あと審査員は横をちよろちよろと歩いているだけで良いかと思うのですが、いかがですか。

(菅) 私も同じ意見です。審査員は何をしゃべって良いのか。

(川原) 何か質問されたら答える？売り込みにくるみたいな。

(事務局) 例年、活動懇談会だけが審査員の皆さんがフラットにグループとのやり取りができるということをお話しされていましたが、今日の議論の中ではその役割はあまりなくても良いと聞き取れたのですけれども、その辺はいかがでしょうか。

(杉崎) 先輩グループの発言の方がインパクトがあって、この場合は大事ではないかと。言うてはいけないわけではない、そこは議論に口を出しても良いわけではありますけれども。

(菅) 私たちには後で見学する機会もあるし、審査投票するまでの機会がいくつかあります。「今回は黙ってる」と言われると嫌だけど、まち普請事業を育てるためにも先輩グループがここに来て、提案グループとやり取りしていただける機会を尊重する方が制度を育てていくためには大切な機会という気がします。

(杉崎) 先輩グループの金言を本当は残しておきたいですね。いつも聞いていて思いますが。

(事務局) 記録は毎年残しています。あともう1点。交流タイムについてですが、まず質問しやすいように、誰か分かるようにご紹介することと、名札を作るということは取り入れるとして、それ以外に時間配分をこちらで組み立てて、例えばワールドカフェのようなイメージで審査員の皆様をテーブルに配置させていただいて、参加者が回るみたいなどころまでは不要で、交流の方法はフリーでよいでしょうか。

(杉崎) あの人に聞きたいと言ったらあの人のところに行くときに分かりやすく名札を作る。

(川原) ただ、ある団体がある人をずっと独り占めしてしまうような状況にならないように、我々が意識しておけば良いのか、そこだけ配慮ができるかと思いかなど。

(事務局) 分かりました。独占をなるべく避ける、話したい人が話せる状況を作ります。

(杉崎) 横で独り占めしないようにしてくださいというのは欲しいですね。横で一緒に話を聞くのが。

(事務局) 例えば列が並んだ時には、行政の職員がおりますから、「少し短めに」などの声かけ程度で、ゆるやかにやらせていただいた方が相談の雰囲気は保てるかと思いましたので、その辺も相談して進めます。

(河上) 審査員は今回はテーブルの席には座らないでよいですか。

(杉崎) 私は座らなくても良いかなと思っています。

(岡本) 審査員はあまり必要ないですね。

(河上) 発言したいときはどうしますか。

(岡本) 自分たちが実際これからどうやっていこうかと悩んでいるときだから、実際やってきた先輩グループの人たちの意見の方が重みがあるわけですね。私たち審査員は距離があるかもしれないし、だからフラフラで良いかなと思っています。

(川原) どういう質問をしたら良いか提案グループが分からない場合があると思うので、話を聞いて「こういうことを先輩の人たちにアドバイスしてもらえたら良いかな」という場合に、代わりに質問をするような役割とか、そういうことが周りで出来ればよいかなと思っています。

(杉崎) 周りにふらふらいて、議論に入っても良いわけですよ。

(川原) 議論に入っていて、「今悩んでいることはこういうことではないですか」というように、少し水を向けることができれば良いのではと思います。

(河上) ふらふらだから担当もなしで。

(杉崎) 「お互いバランスに気をつける」ということはしましょう。いつも偏るという話が出るので。

(川原) 審査員である我々が答えるというのが何となくやりづらいなど。

(事務局) 事務局としては、先輩グループや提案グループが話している場に審査員にも同席させていただいて、その様子を確認いただければという趣旨で、また、部屋が3つあつ

て、その中で審査員が多く集まってしまう部屋があったり、あるいは誰もいない部屋があるということは、来てる団体にとっては審査員に聞いてもらっているという空気が、モチベーションとして大切だろうというところで、出来れば着席を提案しておりました。

(杉崎) それは配慮しますので、なるべく固まらないように。むしろ私たちも色々な…。

(岡本) 座っていた方が楽ですね。

(杉崎) 座っても良いですね。椅子があつて、座っても良い。私たちも他のところ見たいですね。

(菅) 提案とすれば委員としてここに着席ではなくて、この部屋には委員がいるという程度で、柔らかさを持たせてもらえればありがたい。やはり「あの人は選ぶ人だ」というオーラを出してしまう。

(鈴木) ウロウロしていた方が余計にオーラがありませんか。

(菅) 何が言いたいかという、部屋ごとに分散するというのは、重要なことだと思います。部屋にいるということは。着席で「ここは委員の席」という座り方ではなくて、必ずそれぞれの部屋には委員が片隅で状況を把握しているという方が、私はうろうろという概念に近くて良いと思います。その違いは私は選択肢の幅でこだわりはしませんけれど。

(杉崎) 見栄えというか、場についての心配は出ると思っていました。そこは配慮してバランスよく動いて、椅子があれば座って話を聞くし、という少し柔軟に動かさせていただけないでしょうか。

(河上) 担当は、なしでしょうか。

(杉崎) 2つ話が出ていて、我々が役割でしっかりと入ると審査員ということでその場が良くないという話と、一方でふらふらして落ち着かないという話ですね。

(菅) 逆に審査員席に座ってもらうということを事務局では希望をしている、そういう構えにしたいという話ですか。

(事務局) その形でご提案をしましたが、それに縛られず、委員の皆様がより効率的、効果的だという案を議論いただけるのであれば、それを最大限配慮したいと考えております。

(川原) タイトルが、「先輩の人たちに相談する会」であるということが全面に出れば、そのような配置になって、それを委員も見守っているという配置なら別に良いかなと。

(菅) まちづくりは、自ら育っていける状況を、私たちがどう作ることができるかということが重要だと思っています。コンテストだから審査しなければいけない責任はあるし、予算を確保してこの事業を運用していかなければいけないという役所の責任もあるけれども、今回は自由な感じの方が彼ら自らが育つ気がします。

(事務局) 12 ページに会場のレイアウトで「委員」とありますけれども、ここに席は用意しないということで。

(菅) 席は欲しいですね。後ろがちよっと離れたところにでも。

(杉崎) 多分、我々椅子を持って近づいて座ったりするわけですから。これでやってみませんか。ということで、案①で、少し交流の工夫をしていただいて、審査員は自由に、バランスに配慮しながら動き、適宜その場の議論が豊かになるために参加していくというスタンスでどうでしょうか。

(川原) ごめんなさい、このステップアップシートですが、空間イメージ、空間情報が全然ないのでいいのでしょうか。どういう場になっていくのかというのがないとハードを作る事業なので、コメントがしづらいですが。一次の時に持ってきた絵のままでも最低限良いと思います。どういう場所を作りたいのだろうという。

(杉崎) 先輩グループの人に何をやりたいのかイメージが伝わらないというのはありますね。

(塩入) 前回は提案チームが模造紙か何かを持ってきて、「自分たちの絵はこういう絵です」と説明していました。

(川原) そのようなものがあるという前提であるならば、大丈夫です。

(事務局) ハードの部分については、一次コンテストと活動懇談会の時点ではそれほど変わってはいないと思います。

(菅) 今の話は、お金の話にもまだ踏み込んでできない状態ということに繋がってますよね。何か持ってきて欲しいですね。

(河上) 持ってくるということは書くか言うかした方が良いですね。

(杉崎) 一次のパネルでも良いので。

(事務局) 提案グループには一次コンテストで使用した模造紙を持ってくるように伝えておきます。

(川原) 相談会はなるべく具体的に持ってくれば持ってくるほど、有効だと思うので。

(岡本) でもコンテストの後でホッとして、すぐに夏休みですよ。そして9月でそんなに進めていないと思います。そこまで煮詰まっていない。だいたい私たちもしていません。ここでヒントを得て「やらなきゃいけないんだ頑張ろう」というところが9月8日の懇談会ではないでしょうか。それほど進んでいないと思いますよ。

(川原) やはり過剰な要望をしない方が良いということですね。

(塩入) たぶん先輩のチームは「こんな状況ではとんでもない」と言われるでしょうね。

(川原) 一次のパネルを持ってきてもらえれば良いですかね。

(杉崎) 要はここでネジを巻くタイミングというわけです。何らかの一次のものを持ってきてもらうというので良いのではないのでしょうか。

4 企業との連携について【資料 4-1~4-2】

(事務局) (資料に基づいて、概要を説明)

(杉崎) 「これをやる」という事務局からの提案でしょうか。

(事務局) 「やることを考えている」ということです。

(杉崎) これを議論すると、多くの話題が出てくるので、また次の機会にしたいですね。

「こういうことを今考えているので、もう少し上手く機能させるためには」という議題をどこかでやりましょうということですね。

(菅) 構造的に大きくピントが違っているのではないかと思います。今の話は団体企画に対するマッチングですよ。マッチングの話ではなくて、ヨコハマ市民まち普請事業をどう支えるかということです。

新しい構造を作るというのは、私も前から習慣的に言ってきましたが、全然そういう議論になっていかない。今も聞いていて、そっちの選択肢をどうしてとらないのかなと思います。この事業の志というものを育てるというステークホルダーをどう作るか、

という議論をやるべきなのではないかというのが、私が今発言したいことです。

「市民発意からの公づくり」というのがこの事業のとても素晴らしい点だと思いますが、団体の企画をいかに支援するかや、どうマッチングするかとか、そういったステージよりも、もう少し構造的な、そういう志を社会としてどう支えるシステムができるのか、という議論をもう1つやれるのではないかと思います。例えば、社協とか連長とか区や市職員とか、それから色々な造園の業者の組合、大学やNPOとか、言うなれば市民発意のまちづくりを支えようという思いを持っている人たちがたくさんいると思うのですが、その人たちのすべての資源を、この事業を育てるためにどう関係づけるかという、そういうステージの議論を合わせてやっていった方が良いと思います。

支援の対象は、このまち普請事業そのものと団体企画と2種類あるという認識を持って、関われる状況やチャンネルをどう作るかという話をした方がよいと予々思っていて、それを話してきているつもりだったのですが、今日もその話題が乗っかってなかったので、もし次の機会にでもできれば。

(杉崎) そういう議論出来ますかね。つまり一対一でマッチングするとプラットフォームとしての大きな枠があって、それができるとその中で繋がっていくかもしれない、そういう大きな議論だと思います。どこかでもう少し大きい枠組みで、それをベースに話をするという機会をぜひ作りましょう。たぶんこの時期に議論しないとまた春になってしまいます。

5 その他【資料5-1～5-2】

(事務局) (資料に基づいて、概要を説明)

- ・参加者数がblankになっていますが、回収数52で括弧内は昨年度の実績になっております。その横、参加者数が204です。そのうち、提案グループが96名です。一般が108名となっております。昨年度はほぼ同程度の参加者数でした。
- ・コンテストの満足度に関する自由記述において、全体を通して共通するのは、決選投票のことに審査のプロセスに関するもの、発表時間や午後のやり方であったりです。良いと書いている意見もあるし、良くないと書いている意見もあります。この辺りは、来年度の一次コンテストに向けて考えていきたいと思っています。特に目立つのは、「審査員数を奇数にするべき」というものです。
- ・宮ノマエストロの整備状況について、あとカマドや外構の部分を作っていくのですが、建物の中ではもうプレオープンといった形で活動を始めています。ヨガ教室であったり、ベビーマッサージなど、結構、参加者数も定員をオーバーすることもあれば、最小催行人数に達せず中止するというものもあり、色々と試行錯誤しながらやっています。9月9日に正式オープンです。委員の皆様には別途お知らせしますが、特にオープニングセレモニーなどは行わないと聞いています。
- ・荏子田太陽公園愛護会は現在、建物の設計をしているところです。
- ・美しが丘アセス委員会遊歩道ワーキンググループは、階段のカラーリングなどをワークショップでやる準備をしています。

資料

- 1 平成29年度整備箇所(熊野の森もろおかスタイル)の状況について(資料1)
- 2 第二次提案書改定案のポイント(資料2-1)
- 3 事務局案について委員からいただいたご意見(資料2-2)

	4 第二次提案書様式 (案)【現改比較】(資料 2-3)
	5 第一次提案書様式 (参考資料) (資料 2-4)
	6 活動懇談会企画案 (資料 3-1)
	7 活動懇談会「ステップアップシート案」(資料 3-2)
	8 企業との連携について (資料 4-1)
	9 企業マッチング会成果 (平成 27~29 年度) (資料 4-2)
	10 平成 30 年度一次コンテストアンケート結果 (資料 5-1)
	11 平成 30 年度整備施設状況 (資料 5-2)